

平成31（令和元）年度 教育センターニュース

教育センター・ニュース

教育センター全体の活動

● 2019 年度新入生全学共通科目学修相談会

教育センターでは毎年新入生を対象に教育センター教員による「新入生全学共通科目学修相談会」を開催しており、2019 年も 4 月 3 日（9 時～17 時）に実施しました。

今年度から、教員が新入生の個別相談を受ける「相談室」に加えて、相談を受ける前に新入生に対応する「相談準備室」を別室に設け、相談会の担当教員 2 名が事前対応にあたる方式にしました。この新しい方式では、相談を希望する新入生はまず「相談準備室」に入り、「質問票」記入後、相談概要ヒアリングを経て「相談室」の適切な相談対応教員に振分けられます。「相談室」入室前にこうしたプロセスを経ることによって、新入生は相談・質問内容を整理する時間をもつことができ、また担当教員が事前に対応して適切に誘導することで、次の「相談室」での相談をより実質的なものとするができるようになりました。

当日は総数 233 名の新入生が来室しました。このうち「相談準備室」での事前相談により 50 名がその場で問題を解決し、残る 183 名が別室に移って、教育センター教員が個別に相談にあたりました。その詳細は、男女別内訳：男 104 名、女 79 名、学部別内訳：地域学部 15 名、医学部 56 名、農学部 34 名、工学部 78 名、でした。相談内容は、教養科目・外国語科目・健康スポーツ科目に加えて、教育課程表の見方、選択必修科目の取り方・選び方、抽選カード記入法その他、多岐にわたりました。

(担当：瀬戸邦弘、松本雅弘)

● 教育の内部質保証体制の確立に向けた新たな動き

次回の大学機関別認証評価の大学評価基準の重点評価項目として、(i)教育の内部質保証の体制が確立していること、(ii)その手順が確立していること、(iii)実際にそれらが有効に機能していることの 3 点が挙げられています。昨年度、本学でもこれに対応するために学長室に設置された「内部質保証体制構築グループ」が進めてきた「内部質保証推進プロジェクト」を、今年度からは、田村教育担当理事・副学長が直接、内部質保証体制構築グループを直轄、本プロジェクトを推進することとなりました。この新体制の下、早速、内部質保証体制の整備と、ガイドラインに沿った全学および各部局の 3 ポリシー（ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシー）の見直しが行われました。さらに、科目ナンバリングに関しても、本原稿執筆時点（令和 2 年 1 月 28 日現在）において作業が進行中です。

● 数理・データサイエンス教育体制の確立とそれに向けた準備

政府によって、すべての国民がデジタル時代の「読み・書き・そろばん」である数理・データサイエンス・AIの基礎などの必要な力を育み、あらゆる分野で活躍できる人材を養成するという目標が掲げられ、2025年までに大学の全学生が数理・データサイエンス・AIの基礎を習得可能になる教育体制を確立することが求められているところです。本学においてもこれに対応すべく、総合メディア基盤センターの協力のもと、来年（令和2年）度から全学共通科目である1年次生必修科目の「情報リテラシー」において、このリテラシーレベルの内容の講義を行う運びとなりました（より進んだ内容の講義開設等については、現在検討中です）。また、これと関連して、全学共通科目・基幹科目・自然分野において「データ科学の基礎」を本年度後期に開講しました。

（教育センター長：橋本隆司）

高等教育研究開発部門の活動

2019年6月中旬の1週間、共通教育棟で行われる授業公開を実施しました。多くの教職員が授業を参観し、授業の改善に関する有益な意見やアイデアが多く寄せられました。同じく6月、新任教員FD研修を実施しました。最初に、教育グランドデザインや3ポリシーなど本学の教育方針の説明を行い、次にシラバスの作成や講義の基本的な進め方などの解説、また、吉野学長特別補佐による「専門科目での授業」に関する講演が行われました。後半、米子ー鳥取キャンパスの間でテレビ会議システムを通じて、授業の進め方などについて活発な意見交換が行われました。

10月、「データサイエンス教育」に関するFD講演会を実施しました。先行して、同教育を開始している山口大学より松野教授を招き、データサイエンス教育の意義、教育方法、教材開発など多方面の内容で講演が行われました。

12月には、共通教育棟の授業公開（後期）を一週間実施しました。授業見学を行った参加者からの貴重な意見が寄せられ、授業の改善に役立てることができました。同じく12月、「学生参加型教育」をテーマにFD研修会を実施しました。近年、大学教育において、学ぶ側の学修到達度・理解度が重視されており、これを実現するうえで懸念されているのは、教員による一方向的な講義形式の授業だといわれています。研修会では、工学部の長曾我部助教が情報端末「クリッカー」を用いた学生と双方向の教育を実施した事例の報告が行われました。報告後は、この事例を中心に活発な質疑応答が行われました。

2020年1月、教育支援委員会において、2019年度前期の授業アンケートの傾向及び改善等について報告を行いました。各部局の傾向と改善方法、また学生の自由記述からの改善点など多角的な視点からの報告を行いました。

（部門長：永松利文）

共通教育開発部門の活動

● 米子地区全学共通教育に関する調査

米子地区の教学マネジメントとして、教育センター教員による米子地区全学共通教育に関する調査を実施しました。(前期：6月24、25日、後期：12月10日)

調査において、授業参観、非常勤講師も含めた担当教員との意見交換のほか、学生へのアンケート、ヒアリングを行いました。

(部門長：橋本隆司)

外国語部門の活動

● 実用フランス語技能検定試験

フランス語教室では、令和元年6月16日、共通教育棟を試験会場として、実用フランス語技能検定試験(文部科学省後援フランス語教育振興協会主催)を実施しました。

● 台湾銘傳大学・東海大学の学生と教室交流

中国語では、動機付けの観点から自律的外国語学習をうながす工夫として、台湾銘傳大学・東海大学の学生と教室交流を行ないました。二年次を対象とする中国語応用クラスにおいて、短期日本語研修を受ける13名の学生たちと交流を行ない、台湾への異文化理解を深めました。この取り組みは2014年度より毎年1回をベースに、6年間連続展開されています。

● 令和元年度「英語基礎力強化プログラム(TOEIC準備コース)」

今年度は中級レベルのクラスを2クラス同時開講という形式(同一内容で別の曜日)を採用しました。各クラス週一回の開講で10月の2週目から15回の予定で実施しています。今年度はアルク教育社提供のe-learning教材(ALC NetAcademy NEXTのTOEIC Listening & Readingテスト)を併用し、自学自習の支援も行いながら授業を行っています。受講者数(初回授業登録者数)は合計65名で、初回の授業でe-learning教材のTOEICミニテストを実施し受講前のスコアを算出しています。なお、最後の授業で同じくTOEICのミニテストを実施し受講後のスコアの伸びを測定することを予定しています。

● 「ラテンアメリカを知ろう」

鳥取大学エクステンション&アウトリーチ事業「ラテンアメリカを知ろう」が、6月29日(土)に開催され、メキシコ音楽マリアッチ“エルマノス・ミシナ”によるボレロや中南米諸国の曲が演奏されるなか、70名の参加者はメキシコについて知り、他国の人との交流をおこないました。

8月3日(土)のこのイベントはスペイン語で開催されました。参加人数は40名で、参加者はスペイン語でゲームなどを含め交流し、スペイン語圏の国について学びました。

● 令和元年度「国内短期集中英語研修“イマージョンプログラム”」

令和元年度第一回イマージョンプログラムは6月15日（土）、16日（日）に開催され、1日目は16名、2日目は15名が参加し、オーストラリア出身の大谷ショーン講師の指導のもと英語漬けの2日間を過ごしました。1日目は、「海と大地の自然館」において英語でビデオ鑑賞し、その後砂丘を散策し、万葉歴史館で英語で万葉の歴史を学びました。2日目は4グループに分かれ、カナダとバングラデシュ出身の2人のTAの助けを受けながら、1日目に体験したことを英語でプレゼンテーションしました。参加した学生は、「英語を話すことに対し抵抗がなくなった」、「留学に行きたくなった」、「英語が楽しくなった」等、前向きな感想を多く寄せていました。（第2回は中止。）

第3回イマージョンプログラムは11月30日（土）、12月1日（日）に開催され、1日目は12名、2日目は10名が参加し、英語漬けの2日間を過ごしました。1日目は英語オンリーのバスの小旅行形式で、水木しげるロード、青山剛昌ふるさと館、砂の美術館を訪れました。2日目は3グループに分かれ、英語講師の指導のもと、ケニアとインドネシア出身の2人のTAのサポートを受けながら、1日目に体験したことを英語でまとめ、発表しました。参加した学生は、「プログラムが進むにつれて英語を話すことを楽しめるようになった」、「異なる文化を持つ人の話を聞くのも、知るのも、楽しかった」と報告していました。

（部門長：福安勝則）

健康スポーツ部門の活動

● 地域自然環境を活用したスポーツプログラムの構築・運用

山陰の豊かな自然環境を十二分に活用するべく本部門ではさまざまな取り組みを進めています。たとえば実技科目として「地域スポーツ支援プログラム（アクアスポーツ1）」を開講しています。この講座ではスキューバダイビング体験学習を通じて、海洋国日本を育む「海」を理解し、身近なものとして親しむための知識や技術を養う事を目指しています。また、同時に生涯を通じてアウトドアスポーツを楽しむための資質を身に付ける事も重要な目的となっています。本講座では、実技に先立ち事前学習として「水中での身体」や「自然保護」などの座学を受講し、ダイビングの理論と水中という異空間に関する基礎知識、また生態系など自然環境の大切さなどを学ぶ事になります。続いて学内プールにおいてダイビングの基礎実習を実施し、器材の使い方やダイビングを安全に実施するための知識と技能をしっかりと身に付ける事になります。これらを経て、学生たちは、本格的な海洋ダイビングを体験する事になるのです。

ところで、本講座の海洋実習は、地球科学的に重要な価値を持つ地域として認められている「山陰海岸ジオパーク」内に位置する岩美周辺を中心に展開されています。このような恵まれた実習環境の中で、日頃は大学（教室）でしか会わない友人達と、これまで経験した事のないような濃密な時間と空間を共有し、多くの学生は本講座を通して「親友」と呼べる仲間を得る事になっているようです。

本講座のように、健康スポーツ科目では本学が地理的に享受する恵まれた自然環境を積極的に学びの空間として提供し、全国各地から参集する学生に「活きた山陰」を体験していただく機会を四季折々に創出する事を目指しています。



[岩美における海洋実習風景]

● トレーニングルームの活用促進にむけて

鳥取キャンパス武道館 1 階のトレーニングルームは、健康スポーツ科学実技の授業以外にも、サークル活動や学生や教職員個人の健康維持・促進の場として利用されています。今年度の利用者数は延べ 2500 名を超えており(5 年前より 1000 名程増)、使用料がかからないこともあり多くの皆さんの憩いの場となっています。本部門では、各期が始まる頃に新規利用者説明会を実施し、安全で快適な利用のお手伝いをしています。また、近年の傾向としては、留学生の利用者も増加しており、トレーニングルームはひとつの国際交流空間としても期待されています。

● 地域貢献活動の推進

健康スポーツ部門では、大学内のみならず地域における「健康」に目を向け、「健康とスポーツ」を中心とする地域貢献活動を積極的に展開してきており、今年度も下記のような取り組みが行われました。

- ①公益財団法人鳥取県体育協会主催「鳥取県体育協会公認トレーナー養成講習会」にて講師を務める。
- ②鳥取県介護予防事業「目指せ健康長寿！家族で地域でご当地体操」を開催した。
- ③鳥取県食生活改善推進員連絡協議会総会において、介護予防の施策として注目されている「フレイル対策」について講義を行った。
- ④県長寿社会課との合同事業である「ご当地体操交流会」について本年度開催の内容についての検討会を行った。
- ⑤琴浦町食生活改善員総会において、「運動習慣の実践支援方法」について講演を行った。
- ⑥公益財団法人鳥取県体育協会主催「スポーツ少年団認定員養成講習会」に講師を務める。

⑦日本赤十字社鳥取県支部と共催し、日本赤十字社「水上安全法救助員養成講習Ⅰ」を開催した。

⑧受託研究「サーキット式コンバインドトレーニング施設の誘致が利用者の健康関連体力の向上や医療費適正化に及ぼす効果」（大山町）を実施。

（部門長：瀬戸邦弘）